

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成30(2018)年  
**9月号**  
通巻577号  
毎月23日発行  
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成30年9月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷<sup>株</sup>  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



彼岸花 (福岡県うきは市、山奥にあるイビサ・スモーク・レストランの近くで)

齋藤正宏さん撮影

昭和42(1967)年9月23日 月次祭法話より

## 死後の世界があることを知っておく

法主 矢追日聖 (満55歳)

### 自然と人間の結びつき

めっきり秋らしくなつてまいりました、今日はまことにいいお天気でございます。お天気であれば我々は好都合ですけれども、どうも今年は東日本は雨が多すぎて、西日本の方が雨が少ない。それで稲の出来が悪いというようなことを、新聞でも見ておるんです。

そういう自然現象にしても元々は、自然と我々動物との組み合わせが、お互いに持ちつ持たれつ助け合うような形に仕組まれておるんです。けれども今年のような場合、自然の動きと人間の欲求が調和が取れていない、まあうまくいっていないということですね。ここに我々が考えなければならんことがあるんじゃないかと思ふんです。

世の中の自然現象というものは、偶発的に、突然におこるものではないんです。人間も含めすべての自然において、草木にしても、あるいは山にしても、雨にしても、宇宙の一つの心の動きというものを持っているんですね。

人類には言葉もございませんし、自分達の思っていることを他人に伝える意志表示ができるんです。けれども木とか山とか水とかは、我々が聞いて分かるような具体的な意志表示はできず、目に見えないとしても、宇宙の心がやどった動きというものはあるんです。人間も草木も山も水も、みんな共通した一貫した同じものがあるんです。

それなのに人間が地球上に生きるため、住まいするために、自然界があるんだというような考え方で自然をむやみやたらに利用していく。これはちょっとおかしいんですけども、最近は大んだんと自分達さえ都合よくいけばいいというように自然を無視していつてます。例えば今までは山が高く、あるいは木がたくさん生えておって、自然の災害を守っておったんですね。それを、住宅にすれば儲かるとか、景色が見えるようにとか、木も切ってしまうわ、山はならしてしまおうわというように、何万年か前から自然に創られてきた色々なものを破壊していく。

一つの谷ができる、あるいは一つの山の峰ができるという今現在の自然の姿も、何万年か前から色々な活動を受けて、これまでに色々な目に合うて、そして残っておるものなんです。現在、一番良い形において実在しているんです。

それを人間の考えでもって、えて勝手なことをやります。そして結局は、色々な災害が出てくる。そうすると天災というよりも人災であると、最近はそのような言葉を使っています。人災というのは、そもそも自然を無視した結果において出てくるものであるんです。

そういうように自然と我々人間とがどううまく結びつかない、切り離れていくところに、今年のような一つ現象が出てくると思うんです。

## 自然の姿を見て悟る

今はちょうど彼岸でございませう。これは一つの仏教行事になっておりますけれど、本来、人間の悟りの世界のことなんです。

仏教的に悟ってもよろしいけれど、あるいはまた、自然の姿を見て悟るのもいいんです。これは

難しいんですが、言い換えれば、我々人間が例えば一歩でも向上していくことなんです。ということは、端的に言えば、自然の心に一歩でも近づくということ、それが人間の向上だと、私はそう説明したいんです。そういう意味の悟りというのが必要なんです。

で、今まで『大倭新聞』と言うておったのが、この八月、雑誌の形に変わって『大倭』になりました。ごらんになったかどうか知りませんが、もう皆さんの手元にもいつておるはずですよ。

『大倭新聞』に、いわゆる徒然なるままに気軽に書こうというところから出発したんですが、主として皆さんの方の現実の生活から遠いような、靈魂とか心霊とか霊的関連性をもった内容で、ずっと書いてきています。

私は、心霊を研究しておる者でもありませんし、またそういうものは研究して分かるものでもないんですが、私自身が体験してきたことを素直に書いているんです。それにはある程度、批判も入っていますけれども、人から聞いたものとか、あるいは研究発表でも何でもありません。

だから「大倭千一夜」は、現代の世の中にそういうようなことがあり得るといふ一つの事実を今の世の人達に示しておこうというだけの意図なんです。それ以外には何にもないんです。

何でもないことを書いてはおるんですけど、読まれる方の立場になってみれば、その中に汲み取るべき色々なものが含まれていると思うんです。ということ、これも悟りのうちの話なんです。

## 人間は本質的な弱さを持つ

人間には、絶対に信頼できる何かを求めて、すがりたいという弱さがあるんです。これはもうどう

んな人にもあると言っていると思います。まあ、健康であるし金も儲かるし商売も仕事も順調にいくという人には縁の遠い話やけれど、ひとたび何か我がの意思通りいかないことがおこるとか、あるいは自分の上に災害が続けておこってくると、今までの自信は全部失ってしまつて何かにすがりたいというような弱みが出てくる。これは人間の本質的に持つておる弱さなんです。

我々はこの自然の中から湧いてきた動物なんです。その天地自然というものは、人類がこの地球の上に生息する何億何千万年以前から既にもう出来ておるんです。その出来ておる舞台の中へ、人類が一番最後にボンと生み出されたのですから、生まれながらにして本質的に自然に頼る。これは觀念でも何でもありません。オギャツと生まれた赤ん坊が無意識で母親の乳房にぶら下がる、あの心境と同じことなんです。

ところが、自分達の知識で物事が分かってくると、生まれた時の自然の心を忘れてしまう。世の中を自分の思い通りにしていくとか、合理的にいけばいいとか、金さえあればいいんだとかいうような考えでいきます。けれど、ひとたびそれがうまくいかなかった場合には、また生まれた時の里心が出てくる。つまり、超人間の、何か力強いものがありやせんかとね、それにすがりたいという本能的なものが必ず出てくるんです。そうした時、そういう心境になった人が、曲りなりにでも宗教に入っていくことなんです。

そこにまた、野生動物の世界でハゲタカが上から狙っているのと同じで、なるほど神さんとか仏さんとかいう名称を使つてますけれど、人の心の弱さや不幸を餌にしておる人間も世間には沢山あります。引つ掛かった人は不幸ですが、結局それは、助けてもらおうと依存する心です。はたしてそれ

で助かるかどうかという問題なんです。本当は逆なんです。神さん、仏さんが助けられるのでなく、自分が自分で助けるということをね、気付いてもらったらいと思うんですよ。

## 宇宙の心に帰一する

願をかけた病気を動機として神さんにお参りした時に、うまくいくと一応神さんのお陰だと言える話ですけども、その治る、治すというのは神さんでもなし仏さんでもなし、本当は自分の心が、自分で自分の肉体の病気を治してるんですよ。この宇宙の地球の上で、健康で生存できるように最初から仕組まれておるんです。宇宙の心がいわゆる神さんということになるんですけども、宇宙の心はそう出来ておるんですから。

宇宙の心に自分の心が一本になる、即ち帰一した時に、仮にそれが自分の不養生でおこってる病気があれば治っていくだろうし、自分の持ってきた生命力がそこまであればコトンと死んでしまおうし、どっちかなんですよ。

例えば一つの宗教に入つたとすると、信仰することによってものの考え方が変わってくる。自分が意識しなくても自然の心に近づいておるんです。仏教であろうとキリスト教であろうと何教でもかまわないんです。一つの宗教的な教えが動機となつて、自分の心の垢を取って浄化していく。そうして自然の心と人間個人の心がだんだんと結びついてくる、接近してくるんですね。

お釈迦さんでもイエスさんでも、神さんでも何でもありません。我々人類を生かしておる生命力、生命力の根源、宇宙の心、宇宙の力。我々を生み出してくれた根源の力。そこへ戻っていくんです。大倭は「神ながら」の宗教ですから、その根

源の力を、宇宙の大元霊とか、宇宙の本霊とかね、まあ色んな言い方をしております。

古い日本では天之御中主大神とかの名称を使つてますけれども、結局その根本の一つのもののことです。大倭では「太加天腹大神」という名前にしてるだけであつて、これはもう世界中の宗教の一致するところだと思ふんです。

私達が信仰していく態度としては、常にご本尊、言い換えると宇宙の根本の力、根本エネルギーと、我々個人の肉体を生かしておる生命力、これも宇宙の力なんですけど、それができるだけ接近するように、一致するように努めることなんです。

その方法は、いかなる宗教においてもかまわないうです。念仏を一生懸命唱えてもお題目を唱えてもよろしい。あるいはキリスト教に帰一してもいい。どの宗教に入つてもかまわないう。結論は、どの宗教から入つても同じところへ行つてしまふんです、最後は。

## 宗教と宗教団体は別

ところが現代の、一つの団体を結成しておる宗教団体には、企業のような、まあ金儲け主義のものもたくさんあるんです。宗教とそんなものを混ぜこぜにしてはつまらんです。だから例えば、奈良の大仏さんに拝観料を払うて、ああこの大仏さん、五十三尺五寸あのかと、まあ見せ物のような気持ちで見るといふことはつまらない。

大きな盧舎那仏は、聖武天皇が鎮護国家の大願をかけて造つたんです。だから、仮に入口で拝観料払つても、その最初造られた時の心を知った上において合掌してほしい。それは考えてみればあほみたいなことや。大仏をこしらえて日本の国が治まるんやつたら、巨万の費用を使つたつて

っようなことやけれどね、結果においては国民が苦勞しただけです。経済的に困つて乞食になる者もいたし、色んな難儀をしました。しかし結果論は別として、千二百五十年ほどの昔には一つの真面目な仏教信仰において、日本の国が安泰になるんだと信じた聖武天皇の心というものを汲まなくてはいけないと思ふんです。

今はお寺でも、仏さんを見せるのに拝観料取つてます。それでお寺の維持をしたり坊さんの生活に使つてると思ひますけれども、お金を取るんやから見せ物やと、仏さんまでそういう気持ちで見ることちゃんぽんにする人が多い。

現実には、宗教のような形で金儲け主義でやっているとところもたくさんあるんです。ありますけれども、その宗教の教え自体とは別問題、だということも考えてもらわなきゃいけない。〇〇教の先生は金を供えよと金を取りよる、だから〇〇教はあかんと言うのでは具合が悪いんです。だから自分が、この宗旨はありがたいけれども、その先生や坊さんの精神が自分個人の指導強化にさっぱりに役に立たないと思つたら、そこを止めて他のえ先生おるところに変わったらいんです。信仰する内容さえ一貫しておればどこへ変わったつてかまわないう。まあ憲法でもうたわれておるようには宗教は自由になつておるんですからね。結論からいけば自分をだんだんと向上させていくための宗教であるんです。

## 疑う人は疑つていい

横道にそれましたけれども、この『大倭』という月刊雑誌の「大倭千一夜」についての話に戻りますと、「お化けと幽霊はちがう」という面白い見出しは、編集してくれてる人(柴地則之さん)が

付けたんですけれども、まあ八月でしたからそんな内容にしたんですが、何を言わんとするか。

現代の世界がね、我々人間だけでつくっていくのであれば、お互いに仲良くいくということではないんです。人間対人間であれば話し合いもできる。話がうまくいかない場合には喧嘩になってしまふ、あるいは戦争になってしまふ。強い者は勝つし弱い者は負けるしということ、いわば収まるわけです。人間だけの世界だったらね、人間の思う通りにやっていけばいいんです。死んだら死んだらべえでお終いと。

いわゆる宗教的に言えば、喜びをもって日々暮らすということが理想的です。自分に不足がある、不平不満があるような暮らし方は一番不幸なんです。そうすりゃ自分が好いたことをやってコトンと死んでしまったら人生は面白いんです。クソ真面目に道徳とか法律とか守ってつらい思いすることはない。世の中を太う短こう、面白く暮らした方が得やということにもなるんです。

ところが、これ、なかなかそうはいかないんですね。それがために、この生きておる我々人間だけの世界ではない、また別の世界があると、まず知ってほしいということなんです。私達は死んだ後においてもまた、肉体の持たない人間の世界があるんです。肉体を持っておる人間に、目に見えない心の働きがあるように、人間には頭と幽の世界があって一体なんです。その一つの例として幽霊やお化けの話もするんです。九月号にも続きを書いておきました。

我々人間は、今日はこうして生きておるけれども明日はどうしようかと、次のこと次のこと、計画というものを想定して生きておると思うんです。例えば親というものは、自分に子供ができておるといいう時に、大きくなれば学校も行かさんなら

ん、年頃になれば結婚もささんならん、貯金しとかないかんとか、世間で悪い噂がたつても困るとか、子供のためを思う行動があるわけですね。どの親でも皆、経験してると思う。

だから我々が死んだ場合にもですね、死んで次の世界があることは決まっていますけれども、それが全然分からん人であればどうなるかという問題です。ところが死んで戻って来たという人は無いですから、はっきり分からないんですよ。だから、私は死んだ後の世界のことを、まあ私なりにですが分かっておるからして、分からない人のために余計なことしゃべったり書いたりしてるんです。けれども信じる根拠はどこにもないんですから、疑う人は疑っていいんです。

### 自分の心の栄養にしてほしい

ただ疑って死んだ時に、死んだ世界があったらびっくりせんならんだけだね。それじゃあ気の毒だと、ああして色々書いています。

呼吸が止まり、もう血液が回らない。頭の働きも止まって意識が無くなってくる。俗にこれは死んだということ、二十四時間置いてから火葬するというのが建前になっております。

ところがですよ、スーツと一足飛びに霊の世界へ行くのとは違うんです。肉体の何億の細胞はまだ生きておるんです。だから心臓が止まってから十分、二十分でも生きられる人はあるんです。

完全に死んでしまうまでは、本当はかなり日数がかかるんです。ということは、宇宙の生命力が一つの細胞にも働いているということですから、土の中に埋めて、二、三年経って墓を掘り起こしたら、ああ爪が伸びておった、やれ頭の毛が伸びておったというようなことは、田舎におった

ら経験することなんです。共同墓地ですから新しい穴を掘ると古穴が隣にあるし、十年前に埋めた人のとこをまた掘るんですからね。だから肉体は、埋めた時にすぐに死んでいないんです。

家が雨漏りしたり台風でこけたというのと一緒でね、自分の住まいしていた肉体はもう使いものにならない。その時、肉体に宿っていた霊魂はどないしてるか。

その霊魂は、皆と同じようにこの地球で住まいしてるんです。家族の中におるんです。それで昔の人は、四十九日の間は屋根の棟の上でいるとか言うたんやと思う。自分の家庭内に一緒に、生きておる時と同じ気持で同居してるんです。

そういうような期間が、霊的現象が一番出やすい時です。やれ人魂が出たとか、お化けが出たとか、あるいはどこか道で立つとったとかね。ものを言おうと思っても肉体が無い。歩いて行っても心だけが歩いて行くんです。タクシーが女の人乗せて走ったら、ある家に入った、運転手が料金を請求に行くと、その娘は今日死んだところだとかね、そんな実例もようあるんです。

もし、死んだらそれでお終い、何にも無いのやたらね、太う短こう好いたこととして死ねば、人生一番面白い。ところが皆さんそれが出来ないというの、宇宙の心が有り、死んだ世界のこと自然に教えとるんです。無意識のうちに分かっている。だから死ぬのが怖い。例えば空襲でぐるりが焼け野原なってきたりも何とかして逃げようとする。生きたいと考えて行動するんじゃない、もう無意識に死というものはかなわんと、何とかして生きるとこないかと右往左往するのが人間の性質やと思うんです。そういうものをお互いに皆持っているんです。

けれどもシユンがくれば死ななきやいけない、

こらまあ仕方がない。死ねば死んだで、今言うようにまた死後の世界があるということ、あんた達に知ってほしかったために、霊的な現象を「大倭一夜」の中で色々書いておきます。

私自身が体験してきて、こんなこともありまして書いてあった場合、理屈言うたって分からない。あんた達は信じるよりしようがないんです。死んだら死んだらべえと違うなど、そうすれば生きてる間に我々はどういう心で、どういう生活をしながら生きていくか、深刻に真剣に考えてほしいがために、霊界とか霊魂とか、そんなことを私は皆さんに言うんです。

現在、生きてる我々が、死んだ時に備えてです。明日のためには今日どうしなければいけないか。子供のために親は何をせにやらなければならないことと。法主さんやからあんなこと言うとなんと、他人ごとみたいに思ってしまうたら、あんた達死んだ時にちよつと段取りくるって苦しむと思うんです。

死後の世界で不平不満のない喜びを持った生活ができる一つの原因というものを、短かい我々の人生の中において、今の間に用意してほしい。霊界がどうだと興味本位で世間に発表しようとか、そんなくだらん根性は持つておらないんです。

霊界で苦しむとまた今度、現界に出て来た時に世の中が乱れる。これでは悪循環だからつまらない。それで私は今、極力そういう方面に重点を置いて皆さん方に話しているわけです。

で、雑誌の『大倭』とか、今皆さんの手元にある新聞の『すさのお』という名称は「むすび」という意味ですが、これを大倭の教典だと思つて、一回では本質的なものは分かりませんよ、何回か繰り返して読んで自分の心の栄養にしてほしいことを希望します。

(文責・編集部)

## 夢野久作

### 『ドグラ・マグラ』への挑戦

神奈川県大和市 永 飯 あづみ

#### ▼夢野久作からの挑戦状

これが何度目の挑戦となるのだろうか…。『夢野久作全集4』(三一書房)を、ふと、手にとつて見つけていた。全集であるが、この一冊には、日本探偵小説三大奇書の一つ『ドグラ・マグラ』だけが収録されているのだ。「分厚い…やはり無理だ」。恐る恐る、表紙をめくってみると、一人の男と目が合った。

1頁を使用して、白黒の顔写真。夢野久作である。その眼差しに吸い込まれるようにして、その写真をみつめていた。その写真の下に「大正11年福岡市春吉の石井邸にて」とある。既に誕生日を迎えていたとしたら、夢野久作33歳の頃の写真という事になる。私も今年の5月に、33歳を迎えた。

「狂う覚悟が出来ているか」  
何処からともなく響いてきたように思った。時空を超えた久作の挑戦状、しかと受け取ったア!! これを幕開けに4日間、『夢野久作全集4』と寝食を共にする事となる。

#### ▼とんでもないものに出逢ってしまった

是迄も、幾度となく挑戦してきた筈だった。初めて『ドグラ・マグラ』に触れたのは、何年前の事だったのだろうか。青空文庫で無料でダウンロードできるので、SNSをみるような気軽さで、スマホの画面をタッチした。

「胎児よ 胎児よなぜ躍る 母親の心がわかつ

ておそろしいのか」

…と、とんでもないものに出逢ってしまった。その興奮を抑えきれず、一言一句を味わい逃すまいと、何度もページを行ったり来たりして、チットモ前に進めず…見事な大敗であった。

次に触れたのは、角川文庫だった。米倉斉加年の絵が表紙で、上・下巻ある。読み進めながら、これは精神が狂う(読破した者は、必ず一度は精神に異常を来たすと言われている)どころか、ここに書かれている事こそが真実であり、皆当たり前顔をして『ドグラ・マグラ』の世界を生きているのかも知れないと思う事もあった。この時もまた、上巻を読み終える一歩手前での敗北であった。

けれども『ドグラ・マグラ』への思いは益々強まっていく。正木教授と若林教授が、あの絵巻物に抱いていた思いもそのようであったかもしれないと思うと、『ドグラ・マグラ』そのものが、呉秀の残した絵巻物と化したようにも思えてくる。

長年我が家のどこかに潜み、カバールも何処かへ行つてしまい、ヨレヨレになった鉛丹色の単行本すら、愛しく思えた。逆に気を遣わずに読み込めるとも思った(後に、近所の本屋で、売ればまた仕入れてくれるだろうと新しく購入した為、近所のどんと焼きにて、燃やした経緯あり)。

また、『ドグラ・マグラ』の発想の源を求めて、ドイツ製ユニハンス社の振り子時計を購入したりもした(後に、「杉山家にあつた時計と同じ音色がある」と、実物の音色を聞いた事のある人から太鼓判を押していただいた。現在、本物の杉山家の時計は、福岡県のある額縁屋におかれている)。数えきれない挑戦のその度に、はじめから読み始めてしまうものだから、九州大学精神科の第七号室に若林教授がやってくるシーンばかりを何度も何度も繰り返していた。

## ▼「夢野久作と杉山三代研究会」この出逢い

この文章依頼が来たのが今年の3月。9月20日が杉山龍丸さんの命日なので、その関連の記事をとの事だった。丁度、「夢野久作と杉山三代研究会」に参加していた私は、強気になっていたのか、久作の事なら書けるかもしれないと豪語した。また、それは、まだ到達できていない『ドグラ・マグラ』へ挑戦したかったからでもあった。挑戦状を叩きつけていたのは、私の方だった。

「夢野久作と杉山三代研究会」とは…。

《明治・大正・昭和の激動の時代を駆け抜けた世にも奇妙な一家がありました。その名も、杉山家。現在、この一家で有名人といえば、日本三大奇書『ドグラ・マグラ』を書いた夢野久作でございます。「読むと狂う」と伝わる本を残した夢野久作が生まれた杉山家も一筋縄では行きません。父は、政界のフィクサーと呼ばれ、近代日本を牽引した杉山茂丸。息子は、インド緑化に尽力し、グリーンファーマーとインドから仰がれる杉山龍丸。杉山3代それぞれ生きた世界は違えども、文学から政治まで行ったり来たりと縦横無尽の活躍ぶり。人類の歴史は何故この3代を生み出したのか。この答えを探れば、病んだ現代社会の処方箋にもなりましょう。さてさて、私たちが見ているものは、夢か、現実か…。はたまた夢のような現実か、現実のような夢か…。独りでウンウン悩むも良いけれど、一緒に謎解きしませんか》(「夢野久作と杉山三代研究会」第6回研究大会のチラシより引用。2018年3月に拓殖大学で開催)

初めての参加は、第2回の研究会だった(2013年、福岡県二日市市で開催)。当時は夢野久作の名前すら知らなかった。グリーンファーマーこと杉山龍丸が、全財産をインド緑化に投じたこと

人聞きに聞いた程度。それなのに、福岡まで行ってしまふのだから、自分の行動もなかなか奇怪である。

第6回の研究会は、初の東京開催だった。その半年ほど前だっただろうか。満丸さん(龍丸の長男)の講演が東京であると、Facebookで当日に知り、急遽参加。翌日、研究会を東京でやるための打ち合わせがあるという。その場で、スタツフ側に足を踏み入れた(といっても、ちょっとお手伝いをした程度)。これまた奇縁としかいようがない。

研究会に足を踏み入れたきっかけは、龍丸という事になるか。いや、満丸さんと出逢っているから、満丸か。いや、久作に思い入れが強いのでやっぱり久作か。これから、茂丸だと思えてくるかもしれない。はたまた、三郎平(茂丸の父)か。杉山一族は、それぞれ異なる分野で活躍しながら、それぞれの分野を超越する共通した何かがある。その為、簡単には理解し難いが、境界を越えていくと、新たな境地がみえてくるのではないか。研究会で僅かながらも吸収したものが土台になり、久作の文章から茂丸を彷彿する事ができるし、龍丸の文章から久作を彷彿する事が出来るのだと感じる。まだまだ知らない杉山家が魔物のように潜む。

## ▼「遂に読了」

用意周到でない私は、約5ヶ月の間にもやっばり読了出来ずにいた。

夢野久作自身が、「之を書く為に生きてきた」といい、10年かけて書いた超大作。一生かけても読めないかもしれない。『夢野久作全集4』の月報にも、著名な作家や評論家の何人かが『ドグラ・マグラ』は読んでいないというような事も書いて

あった。プロすら読めていない『ドグラ・マグラ』。その一方、友人の息子(小学生)が、寝転んでハナクソをほじりながら「お母さんこれ面白いよ」と読んでいたと聞いた。アハハハハ…。

結局、締め切り前日の朝に、読み始め、時計と格闘しながら、遂には読了してしまった。アハハハハハハ…。皆さんも是非読むがいい。ハハハハ。(締め切りを大幅に過ぎた事は言うまでもない)

随分と前置きが長くなってしまったが、やはり、政界の黒幕と呼ばれた杉山茂丸が父親だったからこそ書けた内容だと感じられた。元々、『狂人の解放治療』というタイトルで、書き始められた『ドグラ・マグラ』。茂丸が狂人であるとすれば、久作はその解放治療について課題としつつ、自らの狂人性に気づかされたのかもしれない。そんなような事も思うのであった(と、同時に私自身の家・血筋についても考えさせられる)。

そんな読後感に包まれながら、「夢野久作全集4」の最後に掲載されている中島河太郎さんの解題に目を通す。《このような長編の本を、自費出版するのは、文壇から大変うらやましがられた、といわれる。ある意味で、泰道(註、久作の本名)の、東京に於けるデモンストレーションであったであろう。茂丸を父にもつから、このようなことが可能だともいわれたようである。彼は、大変自慢で、子供に、世界一の長い探偵小説の記録を作ったことと、その内容は、世界一の内容をもつものであると、言っていた。とにかく、底抜けの人の良さと、野放図な経済観念を表わした行為であった》(「思想の科学」、昭和四十一年十二月)という杉山龍丸の文章の引用に、可笑しくなった。いつかテレビでみた、インドの大地に「キスしたい」と言った龍丸の姿が思い起こされた。

# 寸 莎

第132回

下村 修一郎さん

## 来んでもええねん

敗戦後の大阪。一面焼け野原と変わり果てた近鉄上本町六丁目駅頭で獅子吼する人達がいた。大倭の旗を立て教服姿の日聖法主と門人である。下村修一郎さん(昭和十年生)は夕陽ヶ丘中学からの下校途中、話を聞いている人達の輪に交じって、「困ってるものは大倭へ来い」と語られていた法主さんを覚えていた。「えらい人もおるもんやなあ」。そう思いながら、何もなかった時代、公園でやり始めていた青空楽団の演奏を聞きに行くのを楽しみにしていた。森下新蔵、川端信春(現大倭会会長の父)、下村末一(修一郎さんの父)は大倭の三羽鳥といわれ、旧拝殿建設以前から法主さんを慕って来邑していた。記憶のある邑人に聞くと「末一さんは粋な人やったなあ」という。来訪者があっても、畦道にわら一



束を座布団代わりにして相談に応じた法主さん。寄付を集めて会所を立てましようと思えへんさん達は願いが、法主さんは断られたそう。その街頭で見かけた法主さんが、日元さん鈴月かあさんと共に、「わしが信心している人や」と父親に紹介されて家に来られたのだから驚いた。祀つてあるハルナガ大明神に対して、修一郎さんも日元さんの聖歌を聴きながら、「わけも分からぬま手手を合わせていた」。

修一郎さんは法主さんに悩みをうち明けたり相談したことは無いが、大人になってからも、「顔、見にきました」と会いに来たそう。

なかなか来ることが出来ないと言ふと法主さんは、「来んでもええねん。大倭へ来るのは大概悩みを持つたときやから、来えへん方がええんや」と言われた。修一郎さんは、「悩みも何もなく、来えへん方が幸

せなんと違うか。わしは法主さんの言葉をそう受け取ったんやけどな。たまにしか会えへんわしのようなんでも同じように付き合つてくれて、安心させてくれた。会うたら、よかつたなあと思える人やつたもんなあ。ユーモアもあつたしな。

月に一回でも拌みに来なあかんとか、何々せなあかんとつたら大変や。大倭教は寄附も言わへんしよ。自分の私欲でやつてるんと違う。法主さんはいつもそんなやつたなあ」。

『大阪名物岩相糎』。玉造にあつた修一郎さんの実家は空襲で一度焼けたが、戦前から粟おこしの原料を作る、下村製粉所を営んでいた。

「原料の米は、航路に出たら船の厨房で米余りまっしやる。それを買い集めて、乾燥させてからからのおこげを作る、おこげ屋」といわれる業種が大阪と神戸にあつて、こちらはそこから買つて製粉するわけや。一日ドンゴロス(麻袋)百本ぐらい作つて二トントラック三台で配達してた。原料屋は大阪に三、四軒しかなかったけど、粟おこし屋は百軒ちかくあつて、そこへ卸すもんやから昔は忙しかつた」。奥様の芳子さんによると、その中でも修一郎さんの母キクエさんは、「手先の器用な働き者で、一番頑張つた人」だつたそう。

今宮工業を卒業して二十歳になつ

た頃、父親から、「お前に全部任したからなと言われ、それからは絶対口出しせえへんかつた」。

昭和三十七年芳子さんと結婚。二人の子供に恵まれる。

工場を三ヶ所に増やし、住み込みの従業員も十二、三人と多かつた。「だいたい四国から来た子達やつたなあ。たまに曾根崎警察から、家出してきた子を雇つてやつてほしいと頼まれ、引き取りに行つたこともあつた」。男の従業員には、「約束を守ること、精一杯やること」を伝え、「嫁さん子供を養つていかなあかのやからと」厳しかつたそう。

粟おこし全盛期の四十年代半ば、時代に合わせて新商品の開発努力をしなければいずれ売れなくなると説いて廻つたが聞いてくれる者はおらず、それならばと、自分でSS製菓を立ち上げ洋風おこしを作つてみたが、先はないと思ひ定めて原料屋で一番最初に工場を閉じた。最も勢いのある時代だ、皆に笑われた。三代に八戸ノ里でマンション経営を始めた。一か八かの賭けだつたという。建設途中オイルショックに引つ掛かつたが何とか乗り越え今に到る。

「人生色々あるけど、お陰さんで生かしてもらつて。今も毎朝起きて一番に大倭に向つて拝んでます。これが一番安心や」(聞き手 李章根)

あじさい日記

第340回大倭会文化行事  
**—人生の最期をどう迎えるか、  
 実践医療の「野の花診療所」へ—**

**日にち** 平成30年10月28日(日)～29日(月)  
**行き先** 鳥取方面、砂の美術館・野の花診療所  
**集合** 奈良 大倭病院前 8時  
**行程** 貸切バスで各所訪問  
 (1日目) 奈良⇒(中国縦貫道)⇒鳥取砂丘・砂の美術館⇒羽合温泉「望湖楼」泊  
 (2日目) 鳥取博物館 鳥取城 昼食  
 ⇒野の花診療所医師・徳永進さん講演 (13～14時)、こぶし館見学⇒奈良

**費用** 3.1万円程度  
**申込** 10月3日(水)まで  
**問合せ** 湯浅芳郎 090-6987-5847  
 溝口富士男 080-3101-1639

8月15日 大倭神宮にて午後2時から立教開宣記念祭及び月次祭。昭和20(1945)年8月15日立教開宣以来、73年です。8月18日 午前8時から大倭墓地、9時過ぎから紫陽花邑の大掃除覗ぎ。今夏の暑さのため、無理しないでと声を掛け合い午前中大体で終了。が、お陰さまで3日前から急に気温が下がる中、特に拝殿を中心に初参加の顔ぶれには助けられました。8月23日 大倭大本宮月次祭。この日は平成元年8月10日大倭安宿苑職員研修会における、拝殿での法話とは一味違う法主さんのお話をお聞きしました。

平成17年7・8月号『おおやまと』に「お盆によせて」(上・下)として掲載分です。  
 8月25日(旧7月15日) 東光大祭及び祖霊祭。午前11時半、東方碑前でご挨拶。12時から奥津斎庭で教長さんによる祖霊祭が行われました。その間、大本宮拝殿では昭和54年9月6日の東光大祭法話をお聞きし、教長さんが拝殿に来られるのを待つて、東光大祭の祭典が行われました。  
 この後、祖霊へのお祭りの済んだ経木が皆さんに返されました。拝殿は一杯の人で、久しぶりの挨拶を交わしたり、また群馬県安中市の野宮征俊さんは新皇教宮の皆さんと一緒に初めて来邑されました。

9月1日 岡山県瀬戸内市で、「邑久長島大橋架橋30周年シンポジウム」。FIWCのキャンパーも多数参加、徳永進・柳川義雄さんは登壇もしました。  
 9月4日 猛烈な台風21号が通過。紫陽花邑や大倭神宮では大量に枝が折れたり葉が落ちたりしただけで、建物にはたいした被害はありませんでした。  
 9月6日 未明に「平成30年北海道胆振東部地震」起こる。  
 大倭神宮月次祭。  
 法主さんの先妻、妙月かあさんのご命日。  
 夜、大倭会館で邑倭の会。  
 9月9日 祝会。この日は「近頃の想定外の自然災害」がとどまることがない話や、昭和40年代前後の紫陽花邑の色々な出来事が話題になりました。  
 大倭安宿苑では8月22日今年度初めての理念研修が行われました。  
 (菅原園)  
 8月19日 夏の恒例行事、流し素麺を行います。

平成30年度大倭会文化講演会  
 (協賛：交流の家・NPO法人むすびの家・FIWC関西委員会)  
**平和への草の根・地下水の実践をたずねて**  
**—ヒロシマでの活動から—**

**日時** 平成30年11月17日(土) 午後2時～  
**場所** 大倭拝殿 **入場無料**  
**講師** たがしゆんすけ 多賀俊介氏

**プロフィール:**  
 ◇1950年、広島県呉市生れ。広島市のノートルダム清心中高等学校に社会科教師として勤務。退職後、「広島・ヒロシマ・広島をあるいて考える会」を立ち上げた。「ヒロシマと沖縄をむすぶつどい」世話人。「韓国の原爆被害者を救援する市民の会」世話人。「シュモーに学ぶ会」メンバー。  
 ※昨年の大倭会文化行事の際、矢部顕さんの紹介で広島平和記念資料館のヒロシマピースボランティアとしてガイドをして頂き、今回の講師として推薦の聲が上がりました。  
 ※終戦直後、広島・長崎で被爆者の住宅建設のワークキャンプをしたアメリカ人のシュモー氏は、キリスト教フレンズ派のクエーカー教徒で、交流の家を建てたFIWC関西委員会との間に、目に見えないつながりが感じられます。  
 講演会終了後、懇親会。会費1500円(夕食付)

(須加宮寮)  
 8月13日 阪本理容さんに男性達が集髪してもらいました。  
 (長曾根寮)  
 8月22日(デイ)フロアに提燈を吊り半被を着て夏祭り。  
 8月23日(特養)誕生会で3名の方のお祝いをしました。  
 (茂毛路園)  
 9月5日 3名の方の誕生会で記念撮影などもしました。  
 (八重垣園)  
 自分達の作った梅ジュース・梅酒を昼食後に飲んでいますが、残り少々です。  
 \*月次祭(大倭神宮) 10月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。  
 \*大倭会主催第597回祝会 10月14日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。  
 \*月次祭(大倭神宮) 10月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。  
 \*月次祭(大倭大本宮) 10月23日(火) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

あんない